

名大医学部学友時報

2018
10

目 次	
1. 外務大臣表彰受賞インタビュー 後藤 秀実 (2)	5. 第 27 回基礎医学セミナー研究発表会 表彰式 (9)
2. 新院長に聞く 公立陶生病院 味岡 正純 (3) 碧南市民病院 亀岡 伸樹 (4) 大同病院 野々垣浩二 (5)	6. 人生山あり谷あり 井口 昭久 (9)
3. 臨床教授のひとつこと 日比 健志 (6)	7. 基礎医学セミナー最優秀受賞者の言葉 (10)
4. 第 30 回日本医学会総会 2019 中部 役員からのご挨拶 (7)	8. 西医体 結果報告 (12)
	9. 西医体 上位入賞者報告 (13)
	10. 名古屋支部総会のお知らせ (16)
	11. 編集後記 (16)

外務大臣表彰 受賞



名古屋大学 名誉教授
後藤 秀実

名古屋大学名誉教授 後藤 秀実 先生 インタビュー

平成 30 年外務大臣表彰受賞者に、名古屋大学名誉教授である後藤秀実先生が選出されました。本賞では、日本と諸外国との友好親善関係の増進において、特に顕著な功績のあった個人及び団体が表彰されます。先生の表彰理由となったのは、「日本とベトナムとの相互理解の促進」です。病態内科学講座消化器内科学教授を退職され、現在は名城病院病院長としてご活躍されている後藤先生にお話を伺いました。

—— 受賞おめでとうございます。今のお気持ちをお聞かせください。

ベトナムへの医療貢献の始まりは、2013 年の経済産業省での「フエ医科薬科大学での内視鏡トレーニング」プロジェクトの採択からです。また、その頃の名古屋大学はアジアにおけるハブを目指していたこともあり、これに賛同する形で始め、それから 6 年間でベトナムの内視鏡を中心とした消化器診療に貢献できたのではないかと思います。今回の受賞を非常に嬉しく思います。我々臨床医が出来ることは、医師の診療技術を向上させることによって、その国民の健康増進に貢献する事です。今回の貢献には名古屋大学消化器内科の医局員や関連病院の医師、あるいは看護師さんのご協力の賜物と感謝しておりますし、この賞は名古屋大学消化器内科グループを代表していただいたとも思っております。更に、私どもの活動が日本政府に認められたのだと思い非常に嬉しく思っています。

—— ベトナムで活動を始められたきっかけをお聞かせください。

2013 年頃の安倍政権は経済産業省を中心に「日本の医療の輸出」を謳っていました。たまたま経済産業省の知人から本プロジェクトを勧められ、企業とコンソーシアムを組んで応募した次第です。ベトナムでの活動は医局員であった林先生がフエ医科薬科大学と共同研究をしていたことから、本大学に内視鏡トレーニングセンターを設立したのが始まりでした。フエには毎月十人程度医師や看護師を 1 週間派遣し、フエを中心とした中部ベトナムの内視鏡の発展に貢献できたと思っています。その後、毎年 5 年間に渡りプロジェクトが採択されましたので、ハノイのバクマイ病院にもセンターを設立出来ましたし、活動もベトナム全体に広げられました。その活動により 2017 年にベトナム保健省から国民健康貢献賞を受賞することが出来ました。

—— ご活動のなかで一番印象に残っていることは何ですか。

当時ベトナムには 500 人ほどの内視鏡医しかおられませんでした（後で分かったことですがラオス、カンボジア、ミャンマーは数十人です）。彼らに勉強の機会を与えますと目を輝かせ技術を習得したいという気持ちが伝わってきます。その勉強の姿が一番印象的です。そのような状況ですので技術習得も早く、今ではベトナムでも早期胃癌に対する内視鏡治療ができるようになりました。しかし、内視鏡医の絶対数がまだまだ少ないため、1 日に 300 人以上の患者の内視鏡をしなければならぬという状況のため、現在では大都市周辺の省病院の技術向上に国を挙げて取り組んでいます。その一方で医師不足を克服するために、医師に診療の魅力をもっと伝え、医師数を増やしていきたいと考えています。

—— 表彰式やレセプションのお話をお聞かせください。

表彰式とレセプションは外務省の飯倉公館において行われましたが、特に印象に残っていることは、河野外務大臣から一人一人賞状を渡された時、「おめでとう」ではなく、国と国の橋渡しに貢献したため「ありがとう」と言われたことです。このような貴重な体験ができたことにより、更に活動を続けたいとも思いました。

—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

やはり大事な事はチャレンジ精神だと思います。失敗しても一度の挑戦で諦めるのではなく、何度も繰り返し挑戦してもらいたいです。また夢を追いかけることも大切なことだと思います。私もアジアの医療の向上という夢を追い続け、邁進したためこのような結果が残せました。やはり学生さんにもチャレンジ精神をもって、夢を追いかけ続けて頂きたいです。

（インタビュアー：小西 なつの、松尾 聡一郎）



表彰式の様子

新院長
に
聞 く

公立陶生病院

あじ おか
味岡まさ よし
正純

公立陶生病院は、名鉄瀬戸線の瀬戸市役所前駅に隣接する総合病院です。病床数 633 床、29 診療科を有し、救急医療や周産期医療、がん医療において地域の中核を担っています。年間 7,000 台前後の救急車を受け入れ、ドクターカーも保持するなど、救急医療にも積極的に取り組んでいます。また、名古屋の東部では唯一のがん拠点病院であるとともに、周産期医療にも注力し、新棟の周産期医療センターでは NICU が従来以上に拡張整備されました。

診療科 内科、神経内科、呼吸器・アレルギー疾患内科、消化器内科、循環器内科、腎臓内科、内分泌・代謝内科、血液・腫瘍内科、緩和ケア内科、化学療法内科、感染症内科、メンタルクリニック、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、歯科口腔外科、救急科、病理診断科

平成 30 年 4 月に病院長に就任された味岡正純先生にお話を伺いました。

—— はじめに、病院長に就任されたお気持ちをお聞かせください。

今、公立の病院経営はこの陶生病院も含めどこも非常に大変な状況で、そのような時に前任の先生から引き継ぎ今回就任しました。今まで当院に勤務してきましたが、院長就任が決まって初めて予想を越える経営状態を知ることになりました。そのため大変な仕事を引き受けたなと思いましたが、そのような状況においても職員の方々から前向きに頑張ろうという気持ちが伝わってきており、全体の意識が 1 つのベクトルに向いていますので、そのため私はその先頭に立ち進めていきたいと思っています。

—— 公立陶生病院の特徴を教えてください。

まず陶生病院は名古屋大学の関連病院の中でも初期研修が非常にしっかりとした病院であると思います。私も内科を志望して陶生病院で初期研修を行いました。陶生病院は研修医を育てる多くのノウハウが蓄積された病院でありますので、そのため医師だけではなく多くの医療職を世に送り出しています。また特に救急医療に対して積極的に基本的な受け入れ拒否はせず、治療を行うといったことも挙げられます。

—— 今後の展望や抱負をお聞かせください。

周りに非常に手ごわい競争相手がいる地域であり、先ほど述べたような経営状態の中、より良い方向へもっていくことが私のすべき仕事であると思います。そのためにより患者目線の医療や、地域に密着した医療が必要になってくると思います。また益々高齢化が進み、特にここ瀬戸市は特に高齢者の方が多いので、そのような状況では今までとは違うアプローチが必要になると思います。例えば高齢者の病気の予防や地域の包括的な医療が挙げられます。そのようにして他の病院とは異なる存在感のある病院にしたいと思います。

—— 卒後研修への取り組みについてお聞かせください。

呼吸器や循環器のような緊急性の高い科は需要があり、志望してくれる人が多い一方で、代謝内科や腎臓内科や小児科などを志望する女性の医師も増えてきております。そのため女性の研修医の方にも門戸を広げ、実情に合った指導体制をとることが必要になってくると思います。またどの科においても非常に熱心な医師がそろっておりますので、研修に関して落胆させることはないと考えていますので、後期研修までぜひ陶生病院でいただきたいと思っています。

—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

私を含め、陶生病院は陶生病院の中で育った医師が多くおります。そのため非常に居心地の良い病院であると思います。そしてこのような規模の病院でないといけない研修や身につかない技術があると思います。総合診療医はいない陶生病院ですが、あらゆる救急患者の診療に精通した若手医師がそろっておりますので、ぜひ見学や研修に来ていただきたいと思っています。

(インタビュー：丹下 恵里花、松尾 聡一郎)



新院長 に 聞 く

碧南市民病院

かめ おか
亀岡

のぶ き
伸樹



碧南市民病院は「温かな心のこもった医療」の提供を病院の基本理念として掲げています。また、地域における中核病院として必要な医療機器を設置するとともに、職員一同日々進歩する医療に対して自己研鑽を行い、市民生活にとって大切な救急医療を重視し、チーム医療による高度医療を行うとともに、リハビリテーション医療にも力を注ぎ、患者中心のより質の高い医療の提供に努めます。併せて、地域医療機関との病診連携を密にし、地域住民から「愛され、選ばれうる病院」を目指します。

診療部門 内科、メンタルクリニック、神経内科、アレルギー科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、病理診断科、歯科口腔外科

平成 30 年 4 月に病院長に就任された亀岡伸樹先生にお話を伺いました。

—— はじめに、病院長に就任されたお気持ちをお聞かせください。

4 年前に副院長として当院に就任した際に感じたことは、職員の志気が高く、若い医師が多く活気があるということでした。地方の中小公立病院として当院も多くの問題を抱えていますが、ビジョンのひとつとして「病院の価値を高めること」を掲げ、病院の構造改革や意識改革に取り組んでいます。厳しい経営状況にありますが、職員一丸となり良い病院にしようと努力しています。

—— 碧南市民病院の特徴を教えてください。

病院設立時以来の基本理念「温かな心のこもった医療」に基づき患者さんに接するというのが、この病院の特徴です。初代吉井院長が定めたこの精神は今も職員に根付いていて、患者さんからの良い評価を受けています。また、公立病院として碧南市の地域医療の中心を担って

おり、地域の医療機関や介護保険施設との連携しながら地域医療を進めています。碧南市は、三河の西の端にあり、川や海にかこまれた独立した地域です。この病院はその中で唯一の総合病院として、市の救急医療も担っていく使命があり、二次救急病院としても機能しています。

—— 今後の展望や抱負をお聞かせください。

少子高齢化が進み、2025 年には団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者になります。人口構成の変化に合わせて、医療体制も変わっていかなくてはなりません。当院はミッションとして、地域包括ケアシステムの中心的な役割を担うこと、を掲げています。地域医療の中で病院の果たす役割は、周辺の医療機関と協力しながら地域で完結した医療を提供していくことです。高齢者の増加に合わせ、この病院もそういった役割を果たせるようになってはなりません。それと同時に地域の急性期病院としての機能も果たすため、しっかりとした救急医療を提供できるように努力していきます。

—— 卒後研修への取り組みについてお聞かせください。

初期研修医の定員は 4 人、今年の一年生は 4 人で二年生は 2 人と波はあるのですが、研修医をみんなで育てようという良い雰囲気ができています。また、見ているだけでなく実地で学びながら経験してゆく体制も整っています。当院では年間約 3500 台の救急車を受け入れていますから、研修医が多い大病院と比較して研修医一人当たりが診る救急車の数は多くなっています。そのため、よくある疾患からまれな救急疾患まで診ることができ良い経験になります。研修が終わって卒業した先生方からは、沢山の症例を経験できて充実した研修だったという感想をよくいただきます。

—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

医療業界というのは本当に狭い世界だということを、卒業して医者になってからよく感じます。仕事も専門職で業界外の人と接する範囲が少なく、狭い世界で生きているため考え方も狭くなってしまいます。ですから自由な時間のあるうちに色々な人と接して視野を広く持つてほしいと思います。卒業すると忙しく中々時間が取れなくなってくるので、学生のうちは留学でもいいし旅行でもいいので、国内国外問わず広い世界を見て欲しいと思います。

(インタビューア：杉浦 健太郎、栗田 祥太郎)

新院長 に 聞 く

大同病院

の の がき こう じ
野々垣浩二



社会医療法人宏潤会大同病院は名鉄常滑線柴田駅から徒歩 3 分ほどのところに位置する急性期病院です。病床数 404 床、27 診療科を有し、24 時間 365 日受け入れ体制の救急センターを備えて地域の急性期医療の中核を担っています。最新医療機器を導入し、地域社会のために積極的に新しい医療を取り入れ、高度急性期医療を追求しています。

診療部門 総合内科、血液・化学療法内科、糖尿病・内分泌内科、腫瘍内科、循環器内科、呼吸器内科、消化器内科、脳神経内科、腎血液浄化科・腎臓内科、膠原病・リウマチ内科、緩和ケア内科、精神科、外科（一般外科、消化器外科、乳腺外科、呼吸器外科、血管外科、肛門外科、小児外科）、形成外科、脳神経外科、整形外科、麻酔科、麻酔科（ペインクリニック）、小児科、産婦人科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、歯科口腔外科、救急科

平成 30 年 4 月に病院長に就任された野々垣浩二先生にお話を伺いました。

—— はじめに、病院長に就任された気持ちをお聞かせください。

大同病院に赴任して 10 年目になりますが、この 10 年間で大同病院が急成長を遂げているのを実感しています。病院をさらに高い次元に持っていくことが、院長に就任した私の使命だと思っています。それと同時に、国は今後急速に進む高齢化社会に対応して病床機能分化をすすめる方向であり、病院として重要な局面に来ているとも感じていますね。大同病院は民間病院なので新しいことを迅速に始められるのが大きな強みです。その強みを生かして前理事長・病院長の功績を引き継ぎ、より高いところを目指し、スピード感をもって更なる変革をすすめたいと思っています。

—— 大同病院の特徴を教えてください。

一番の特徴は、地域に根ざした高度急性期医療です。長期的には地域 No.1 の救急・急性期病院になることを目標としています。大同病院は社会医療法人宏潤会の事業所の一つであり、法人内にはあらゆる機能を有した事業所を運営しています。そのため、急性期医療のみならず、予防医療、介護支援、在宅医療まで幅広い医療サービスを提供できるという特徴があります。他に、中規模民間病院ならではの変革のスピード感や各診療科の垣根の低い連携体制なども挙げられます。

—— 今後の展望や抱負をお聞かせください。

今後、高齢社会において高度急性期医療だけでなく、より幅広い地域のニーズに応えていく必要があると思います。現在、中期目標として地域包括ケアネットワークを牽引する存在になることを目指して医療連携協力事業に力を入れていますし、地域の周産期母子医療センター、がん診療連携拠点病院を取得できるよう体制を整えています。救急医療分野では地域における重症患者の救命率を上げるためドクターカーを導入しました。他にも手外科・マイクロサージャリーセンターや脳外科脊椎センターが最近発足し、より高度な医療を提供できると思います。

—— 卒後研修への取り組みについてお聞かせください。

初期研修医の教育に限らず、あらゆる職種において人材育成は法人が最も力をいれている分野です。その取り組みを認知していただいたのか、初期研修医の定員は 8 名に増加し、研修医マッチングの倍率も年々高くなってきました。初期研修医を対象とした名古屋大学病院との合同 OSCE や外部講師を招いての様々な勉強会が開催されるなど活気ある教育システムになっています。一日あたり外来患者数 1,200 人、年間救急車搬送台数は約 5,000 台であり、症例数としても十分で、中規模病院の強みを生かした行き届いた指導をできると思います。

—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

医療はチームワークなので医師の能力としてコミュニケーション能力は非常に重要です。最初は研修医で指導を受ける立場ですが、数年後には医療チームのリーダーとしてリーダーシップをとることが求められます。そのためにも、学生時代には色々な人との出会いを経験して、豊かな人間になってほしいと思います。

（インタビュアー：佐々木 和磨、木下 朋）

